

「老いを生きる」

私はあと1年余りで80歳になります。70歳位までは仕事一筋の生活でした。その私が退職後、長い間疎遠であったお寺に門徒総代として出入りするようになり、更にご縁をいただいておりますお寺の連続講座を受講し同朋の会推進員となりました。そしてこの頃は“真宗門徒”としての自覚を持たなければならないと思うようになりました。

さて、80歳と言えばまさに老人です。すなわち今私は「老い」を生きることになり、その私の周辺にも様々な老人の生活があります。先日も小学校時代に仲のよかった同級生が亡くなりました。彼は50歳台半ばで奥さんと死別し、以後会うたびに「何も言うことはない。仕事する欲もないので遊んでいるが、楽しいことはない」と言っていた男でした。また一方では「もう死んだ方がよい」と言う同級生もいます。若い時に一念発起して事業を起こして成功し、人が認める程の財を成し、その生活にも勢いがありましたが、10年程前から奥さんに認知症の症状が現れ、遂に施設での介護を要する身となったため、独りの生活になってしまいました。「育てた子どもたちはそれぞれ独立して家庭を持ったため、あまり立ち寄ってくれない。大きな家での年老いたたった独りの生活は明るい希望がない」と言っています。

実はかく言う私も問題を抱えています。家内が30年程前から病弱で入退院を繰り返しています。元気でさえ居てくれたら…と時々考えたものでした。

「一生懸命働いたその後には安らかな老後が…」と誰もが思い描いた生活であったのに、現実にはまさに生・老・病・死の苦の世界のようです。年老いたら誰もが辿らなければならないこのような現実、それが老人の運命とするなら誠に淋しい限りであります。満たされた思いの中で人生の幕を降ろすことが出来たらと願わずにはおれません。

私は推進員になってからいろいろな方とのご縁をいただくようになりました。それまでなかった「法話をお聞きすること」も多くなりました。「人は皆予期せぬ出来事にもがき苦しんで生きているが、それらの事とどのように向き合うかが大切である」と教えられました。「現実には起きた出来事を素直に受け入れるこ

とだ」と。また「その受け止め方によって人生は決まるものだ」ともお聞きしました。「老いを生きることは難しいもの」との思いは少しずつ変わってきたように思います。出来ることなら真宗門徒として、そして一人の推進員として聞法を重ね、皆さんと一緒に報恩感謝の日々を重ねていきたいと念じています。